

「自然」の声を聴け

—英米文学作品における“Nature”をめぐって—

(7)

村田 和穂

<令和8年1月13日受理>

Listen to the Voice of “Nature”

—With Special Reference to “Nature” in English Language Literary Works—
Paper Seven

MURATA Kazuho

The seventh paper explores the controversy that arose when Defoe referred to “Nature” as “God” in a 1706 article in the *Review* (1704-1713), a periodical he published independently for nine years during his prime. In an article in the same *Review* shortly after receiving severe criticisms, Defoe manages to clarify the misunderstanding by using the terminology of “Nature Naturing” and “Nature Natured.” These terms correspond to the Latin terms *Natura Naturans* and *Natura Naturata*, respectively. Defoe uses the former (*Natura Naturans*) in his satirical fiction, *The Consolidator* (1705) to mock the science of the time. Furthermore, this essay, attempting to introduce Wordsworth’s view of “nature,” reconsiders Collingwood’s statement, “mind makes nature,” mentioned in the first paper.

... the mind / Learns from such timely exercise to keep / In wholesome separation **the two natures**, / The one that feels, the other that observes.

(Wordsworth: *The Prelude* [1805] Book XIII, ll. 328-331)

(... 思考する心は、そのような時宜を得た修練から、**二つの自然** (本性) を、感じる自然と観察する自然とに、健全に分離しておくことを学ぶ。) ¹

(ワーズワス：『序曲』 [1805年版] 第13巻)

I デフォーにおける二つの「自然」

デフォー (Daniel Defoe: 1660-1731) は『ロビンソン・クルーソー (*Robinson Crusoe*)』(1719) を始めとするフィクションの執筆に着手する以前は、気鋭のジャーナリストとして『レヴュー (*the Review*)』² の略称で知られる定期刊行物を1704年から1713年に至る9年間の長きにわたり、単独で (!) 毎週発行していた。定期刊行物と言っても、現在の新聞のような日々の出来事の報道ではなく、時事問題に関する

評論に特化したもので、当時の政治、宗教、経済、道徳等の諸問題について公に論評することを目的とした。デフォーの伝記を書いた Sutherland は「仮に『ロビンソン・クルーソー』が間違いなくデフォーの最高傑作とすれば、『レヴュー』は少なくとも彼の最も驚異的な偉業と言えるだろう (If *Robinson Crusoe* is indisputably Defoe’s greatest work, the *Review* can at least claim to be his most astonishing performance. p.106)」と高く評価している。その『レヴュー』の

¹ 引用箇所における太字および下線は全て筆者による (ただしイタリック体は原文のまま)。また引用英文につけた日本語訳は全て筆者によるものである。

² 発刊当初の正確なタイトルは *A Weekly Review of the Affairs of France, Purged from the Errors and Partiality of News-Writers and Petty Statesmen of all Sides* (『あらゆる陣営の新聞記者及び小政治家の誤りや偏見を排除したフランス情勢に関する週刊レビュー。』) 最初は1シート刷り8ページの週1回、すぐに半シート4ページで週2回、1年半後には週3回となる。

1706年1月3日付の記事は「貿易全般について (Of TRADE in General.)」の表題が付けられている通り、「貿易」についての論評なのだが、その中で使用した「自然 (Nature)」の不用意な言い換えが大きな問題に発展することになる。少し長いが、冒頭部分を引用したい：

Trade is a general Exchange of the necessaries and Utensils of Life, from and between Person and person, Place and Place.

The Principal Subjects of Trade are included, in Provisions, House-Furniture, and Cloathing; and they are handed from Place to Place, by an Infinite and incessant Circulation; they are attended with a vast Variety of Handicrafts, to Furnish Tools to make Vessels to Convey, and Instruments to produce and preserve.

'Twould be foreign to the Design of these papers, to give an Index of the several Arts, into which Trade is thus subdivided. I shall go on farther upon the Generals, and then come to Particulars of another sort.

Generally speaking, all the Innumerable of Trade, come under these two Heads; Natural Produce, and Manufacture. The different Climates and Soil in the World, have, by the Wisdom and Direction of Nature Natureing, which I Call GOD, produce'd such differing Species of things, all of them in their kind equally Necessary, or at least Useful and Desirable; as insensibly preserves the Dependance, of the most Remote Parts of the World upon one another; and at least makes them useful to each other, and Contributing to one another's Convenience, Necessity, or Delight. ... (p. 12) (貿易とは、生活必需品や用具を人から人へ、場所から場所へと交換する一般的な取引である。

貿易の主要対象は、食料品、家具、衣類など。これらは、無限かつ絶え間ない循環によって場所から場所へと運ばれ、輸送用の船舶を作るための道具や、製造・保存用の器具などを供給する、多種多様な手工芸品が伴う。

貿易がこのような細分化されている様々な技術の索引を示すことは、本稿の趣旨にそぐわないので、まずは一般的な事項について説明し、その後、別の種類の具体的な事項に移りたい。

一般的に言えば、数え切れないほどの貿易品はすべて2つの項目に分類される、すなわち天然(自然の)産物と製造品である。世界のさまざまな気候や土壌は、創造する自然、それを私は神と呼ぶのだが、の知恵と導きに

よって、非常に異なる種類のを生み出したが、それらはすべて、その種類において同様に必要であるか、少なくとも有用で望ましいものであり、世界の最も遠い地域が互いに依存していることを無意識のうちに維持し、少なくともそれらを互いに役立て、互いの利便性、必要性、または喜びに貢献している。(後略)

上記の文章の趣旨はあくまでも貿易についての説明であり、決して信仰告白のコンテクストではない。貿易品について、人の手が加わった「製造品」との対比で「天然産物」に「自然の (Natural)」という形容詞を用いたため、その流れで、デフォーはその基となる名詞「自然 (Nature)」に言及することになり、多義的ゆえに曖昧性を帯びる「自然」の意味をより明確にするべく“Nature Natureing”（創造する自然：[註]一般的な綴りは Nature Natureing）と記述したに過ぎない。しかし、ここでデフォーは下線部“; which I call GOD”（それを私は神と呼ぶのだが）とこの文脈では余計な挿入句を加えてしまった。この挿入が軽い気持ちなのか深い意図を込めて使用したのか即断はできないが、すでに文筆家として身を立てていたデフォーにとっては「軽い気持ち」では済まされない言い換えである。事実、彼にはこの3年前の1702年、非国教徒側の立場で「非国教徒撲滅への近道 (“The Shortest Way with the Dissenters”)」という過激な内容のパンフレットを発表した廉（かど）で投獄され、さらには晒し台の刑に処せられる、という屈辱的な〈前科〉があった。文筆がもたらす影響力の大きさとその恐怖は身に染みているはずである。この〈自然 = 神〉のパラフレーズは、「神を冒瀆している」という趣旨の（デフォーにとっては想定外の）謗りを受けたようだ。この評論を発表した約2週間後の1月17日の第8号に同じ『レビュー』に〈雑感 (MISCELLANEA)〉として弁明文を載せることになったことから反響の大きさが窺える。その内容は以下の通りである：

As I never expected to write without the Cavils of Objectors; so I little expected to be Tax'd with Blasphemy, which I have a particular Account some people say I am guilty of, in the word *Nature Natureing*, which I say, I call God in Review, No.—

Now as I suppose those People think me of that Opinion, which calls *Nature* God, as the Word *Nature* is generally accepted; I shall not only let them know they are mistaken in me, but give my own Explication

of it, that I may not be censur'd by those, that first pretend not to understand me, and then to misunderstand me.

By Nature Naturing, I understand the God of Nature, or Infinite Power, making both Nature her self, and giving Life and laws to all her subsequent Operations; and therefore I distinguish between Nature Naturing, and Nature Naturesd; one as the Creator of Nature; the other is the Creature Nature actually made; if my Terms are dislik'd, I have nothing to say to that, they are no Originals of mine; and I suppose the Schools are so well acquainted with them, as to give me no need to quote Authors for the usage.

That Nature it self has some Original first Cause by which she acts, appears plainly from this, That there are Effects in the World altogether supernatural, and which must derive from Causes of a superior Quality to Nature; such are the Miracles recorded in Scripture to be acted by the immediate Power of God; as, the Prophet in the Den of Lions; the three Children in the Fire; Jonah living in the Belly of a Fish; the General Deluge; and the like.

Besides the Eternity of the World, which would be deducible from the Divinity of Nature, and a thousand incongruous Errors, which this Absurdity will of Course lead us into, serve to refute the Error; but much more I hope to convince the World I had no such meaning.

But the Author of this Paper is so compass'd about with Cavils and quarrelsome Objectors, that he is oblig'd to answer what another would think it needless to be concern'd at. (*A Review of the State of the English Nation 1706 Part I: Edited by John McVeagh; p. 51*) (私は反対者から難癖をつけられずに書けるとは思っていなかったが、神への不敬で非難されることもほとんど予想していなかった。それは、一部の人々が私が罪を犯したと言うところの『レビュー』—号のある記事で、「創造する自然」という語について、私はそれを神と呼ぶ、と書いていることである。

さて、そのような人々が自然という語が一般に受け入れられているように、自然を神と呼ぶ考えの持ち主と私のことを見做していると仮定すると、私は、彼らが私のことを誤解していると彼らに知らせるだけでなく、最初は私を理解していないふりをして、次に私のことをあ

えて誤解しようとする人々に非難されないためにも、それについての私自身の詳しい説明をするつもりである。

「創造する自然」とは、自然の神、言い換えると、無限の力と私は理解している、すなわち自然自身を造り上げ、その後の彼女（自然）のすべての働きに生命と法則を与えるものと理解している。それ故に、私は「創造する自然」と「創造された自然」を区別する。一方は自然の創造主であり、他方は自然が実際に作った被造物である。もし私の用語がお気に召さないとしても、私から言うべきことは何もない。それらは私が作り出した言葉でないからだ。そして、様々な学派がこれらの用語に詳しいので、私とその語用（用例）について著者をいちいち引用する必要はない。

自然自体には、彼女（自然）が行動するには何らかの淵源の第一原因があるというのは、以下のことから、つまりこの世界にはまったく超自然的な結果があり、それは自然よりも優れた性質の原因から派生しているに違いないということからも明白に思われる。聖書に記録されている奇跡は、神の直接の力によって行われたとされている。例えば、ライオンの穴に閉じ込められた預言者、火の中にいた三人の子供たち、魚の腹の中で生きていたヨナ、（ノアの方舟の）大洪水などである。

さらに、自然の神性から導き出される世界の永遠性、そしてこの不合理さが当然私たちを導くであろう無数の矛盾した誤りは、この誤りを反駁するのに役立つ。しかし、私はむしろ、私がおそらくそのような意味を持っていなかったことを世に納得させたいと願っている。）

しかし、この論文の著者は、批判者や口論好きな反対者たちに囲まれているため、他の人なら気にする必要がないと思うことにも答えざるを得ない。）

この弁明文を読む限り、聖書に記されている（神による）数々の奇跡は「超自然の (supernatural)」、すなわち、自然を超えた出来事であるゆえに、「自然よりも優れた性質の原因 (Causes of a superior Quality to Nature)」、すなわち神の力（導き）によることを示唆している。つまり、自然即神（自然 = 神）ではなく、あくまでも神は自然の上位（自然 < 神）にある、とデフォーは申し開きしているのだ。

ここで興味深いのは、デフォーは「自然」を二つに分け、「創造する自然」と「創造される自然」という専門用語を披露していることだ。³「様々な学派がこれらの用語に詳しい」と言っているように、こ

³ 実は、デフォーは最初の（1706年1月3日付）記事より約半年前の1705年6月20日の『レビュー』にてすでに〈創造する自然〉と〈創造される自然〉について触れている (cf. A

Review of the Affairs of France 1705 Part I edited John McVeagh. [Routledge (2016 [2004]) pp. 292-297.]. この際に問題にならなかったのは、〈創造する自然〉を〈神〉と言い換えてないため

の用語は元々はラテン語で前者は「ナトゥーラ・ナトゥーランス (*Natura Naturans*)」、後者は「ナトゥーラ・ナトゥーラタ (*Natura Naturata*)」であり、それぞれが(専門用語としてではあるが)英語の語彙として定着している。前者の“*Natura Naturans*”については、『リーダーズ・プラス』では「創造する本性[自然]《神》」と定義しているが、〈自然 = 神〉であることを示唆した記述である。さらに、『ブリタニカ国際大百科事典』では「能産的自然 (*natura naturans*)」という表記で取り上げ、「(これは)多くの場合、神や絶対者に等しい」とあり「ブルーノ、スピノザが主要概念にした」と記載している。ジョルダノ・ブルーノ (1548-1600) はイタリアの哲学者、バルフ・デ・スピノザ (1632-1677) はオランダのユダヤ系哲学者で共に「汎神論 (pantheism)」、すなわち「神は超絶した実在であり、物質的宇宙や人間は神の顕示に他ならないとする教義；神を自然と同一視する傾向を持つ」(『ランダムハウス英和大辞典』の“pantheism”の語義より)、を唱えたため、前者は異端審問にかけられ火刑に処せられ、後者は教会から破門された。つまり、このような当時のキリスト教社会にとっては極めて危険な思想をデフォーは信仰として密かに心に抱いていたのであろうか。

極めて多筆であったデフォーは『レビュー』に取り組んでいる時期も、多くの著作を発表した。中でも注目すべきは、1705年に発表した『統合者、あるいは月世界からの様々な交流回想録 (*The Consolidator: or, Memoirs of Sundry Transactions from the World in the Moon*)』(以下、『統合者』)という政治的寓話である。これは副題の「月世界からの」が示す通り、この物語は月世界が舞台である。さらに、執筆者は「月世界の人 (The Man in the Moon) [註: 架空の人物、の意]」としてあり、「『生粋のイギリス人』の作者 (註: デフォーを指す) によって月の言語から翻訳された (Translated from the Lunar Language, by the Author of *The True-born English Man*)」という非常に手の込んだ仕立てになっている。このような架空の世界の設定は、風刺散文物語に適していて、後年のスウィフト (Jonathan Swift: 1667-1745) の『ガリヴァー旅行記 (*Gulliver's Travels*)』(1726) の先駆的作品とも言える。デフォーの狙いもスウィフ

であろう。

⁴ ここでの“Optick”の一般的な綴りは“optic”である。OEDは“optic”の名詞用法に「目」の意味を記録している。“The eye. Usually in plural. Now humorous. Originally the learned and elegant term” (OED s.v. optic, noun 3. 1601-).

トと同様に当時のイギリス社会(特に政治的側面)に攻撃の矛先が向けられているのは明らかだが、スウィフトのように時代を超えた(表面的には子供でも理解できる)普遍的なフィクションには昇華しておらず、Sutherlandも指摘するように「これは彼の時代の人々には非常に面白い政治的寓話だが、今日の平均的な読者には、その時代の政治と宗教についてかなり多くの知識を持っていることが要求される ([*The Consolidator* is] a political allegory very interesting to the men of his own day, but requiring rather more knowledge of contemporary politics and religion than the average reader of to-day can bring to it. p. 142)」のである。それゆえに、筆者にとってこの物語を正確に読み解くのは骨が折れる作業であるが、「自然」という語に注目して読んでいくと、同時期に並行して執筆していた『レビュー』で取り上げているトピックと共通する問題を扱っていることがわかる。次の引用は『統合者』からであるが、『レビュー』で発表していてもおかしくない内容と文体である。とりわけ興味深いのは、上記の『レビュー』の引用で2つに分けた「自然」のうちの「創造する自然 (*Nature Naturing*)」がオリジナルの「ナトゥーラ・ナトゥーランス (*Natura Naturans*)」として使用されていることである：

I have heard, that among the Generality of our people, who being not much addicted to Revelation, have much concern'd themselves about Demonstrations, a generation have risen up, who to solve the Difficulties of **Supernatural** Systems, imagine a mighty vast Something, who has no Form but what represents him to them as one Great Eye: This infinite Optick⁴ they imagine to be *Natura Naturans*, or **Power-forming**; and that as we pretend the Soul of Man has a Similitude in quality to its Original, according to a Notion some People have, who read that so much ridicul'd Old Legend, call'd *Bible*, That *Man was made in the Image of his Maker*: The Soul of Man, therefore, in the Opinion of these **Naturallists**, is one vast Optick Power diffus'd through him into all his Parts, but seated principally in his Head.⁵ (p. 25) (私が聞いた話では、

⁵ 「自然」とは直接関係ないが、同テキストの註釈 (p. 190)によると、引用の最後の下線部“The Soul of Man, ... is one vast Optick Power diffus'd through him into all his Parts, but seated principally in his Head” (人間の魂は(中略)体のすべての部分に浸透しているが、主に頭の中に存在する、ひとつの巨大

(神の) 啓示にあまり執着せず、実証に非常に関心を持つ我々の一般大衆の中に、ある世代が立ち上がり、超自然的な体系の難問を解決するために、極めて巨大な何かを想像する。それは彼らには一つの巨大な目としてその姿が映し出されている。彼らはこの無限の目を〈ナトゥーラ・ナトゥーランス (創造する自然)〉、すなわち、形成する力であると想像している。そして、私たちが人間の魂 (精神・心) がその本来の性質に類似していると主張するように、人間は創造主に似せて作られたという、聖書と呼ばれる非常に嘲笑された古い伝説を読んだ一部の人々の観念によるものである。したがって、人間の魂は、これらの自然科学者たちの意見によれば、体のすべての部分に浸透しているが、主に頭の中に存在する、ひとつの巨大な視覚の力である。)

ここでの記述には当時の科学に対する極めて痛烈な風刺が込められている。下線部の “a mighty vast Something” (極めて巨大な何か)、とは「神」もしくは「絶対者」を示唆しているが、それをここでの科学者たちは “one Great Eye” (一つの大きな目) と揶揄している。この「一つの大きな目」については筆者が使用するテキストに詳細な註釈が施されている。その註によると、当時の科学者たち (フック [Rober Hooke 1635-1703] からニュートン [Sir Isaac Newton 1642-1727] に至る) による「光学 (optics)」への強い関心がこの背景にある、とのこと。さらに「デフォーは、もちろん風刺的に、デカルト信奉者たちによる神の特性と神の創造についての研究調査を念頭に置いている (Defoe has in mind, satirically to be sure, the investigations into the property of God and God’s creation by Cartesians, p. 189)」。また、「17世紀において、〈一つの巨大な目〉としての神の力の概念は、望遠鏡や顕微鏡に対する当時の人々の強い関心からそれ程かけ離れたものではありえない (in the seventeenth century, the conception of divine power as “one Great Eye” cannot be too far removed from the fascination of the age with the telescope and microscope. p. 190)」という指摘は興味深い。

確かに、望遠鏡や顕微鏡の開発はこれまで畏怖の対象であった「自然」、すなわち「創造された自然」を明らかにしようとする自然科学の発達と密接に関係しているが、それはデフォーにとっては神の御業に異議を唱える暴挙に映ったようだ。月世界での上

記の引用の後に、顕微鏡についての言及が見られる：

In short, I found, indeed, they had a great deal more Knowledge of things than we in this World; and that Nature, Science, and Reason, had obtained great Improvements in the *Lunar World*; but as to *Religion*, it was the same equally resign’d to and concluded in *Faith and Redemption*; so I shall give the World no great Information of these things.

I come next to some other strange Acquirements obtained by the helps of these Glasses; and particularly for the discerning the Imperceptibles of Nature; such as, the *Soul, Thought, Honesty, Religion, Virginity*, and an Hundred other nice things, too small for humane Discerning.

The Discoveries made by these Glasses, as to the Soul, are of a very diverting Variety; some *Hieroglyphical, and Emblematical*, and some Demonstrative.

The Hieroglyphical Discoveries of the Soul make it appear in the Image of its Maker; and the Analogy is remarkable, even in the very *Simily*; for as they represent the Original of Nature as One Great Eye, illuminating as well as discerning all things; ... (p. 38)

(要するに、私は彼ら [註：月の住人] が確かにこの世の我々よりもはるかに多くの知識を持っていることが分かった。そして自然、科学、そして理性は月の世界で大きな進歩を遂げていた。しかし宗教に関しては、彼らもまた信仰と救済に等しく服従し、それに帰結していた。したがって、私はこれらの事柄について世に大した情報を与えるつもりはない。

次に、これらの顕微鏡の助けによって得られた他の奇妙な成果について述べる。特に、魂 (精神・心)、思考、誠実さ、宗教心、純潔、そしてその他、人間的な識別には及ばない百もの微細なものといった自然の知覚できないものを識別することについて。

これらの顕微鏡によって魂に関してなされた発見は、非常に興味深い多様性に富んでいる。象形文字的なもの、象徴的なもの、そして指示的なものなどがある。

魂に関する象形文字的な発見は、魂を創造主のイメージで現す。そして、その類似性は、直喩においても注目に値する。なぜなら、彼らは自然の根源を、すべてのものを識別すると同時に照らし出す一つの大きな目と

な視覚の力である) については、デカルトが人の魂の位置 (在処) を脳の「松果体 (pineal gland)」にあると推測したこ

とへの当て擦りである、という指摘は非常に興味深い。

して表すからである)。

下線部 “the discerning the Imperceptibles of Nature” (自然の知覚できないものを識別すること) について、顕微鏡はそもそも微生物のような裸眼では見ることのできなかつた微細な存在を識別するためのものであるが、月世界の顕微鏡では「魂 (精神・心)、思考、誠実さ、宗教心、純潔」など、そもそも不可視なはずの (形而上的) 抽象概念を識別するというのは、後続する「魂」の発見された形の描写に見られるように、非常に滑稽であり痛烈な皮肉を感じさせる。ただし、「魂」の姿が「創造主の像 (イメージ)」として現れるのは、〈神は一人ひとりに内在する〉という主張に思われ、非常に示唆的である。ただ、その像が「一つの大きな目」であることが風刺の対象になるのだ。

このように1705～6年に発表された『レビュー』や『調停者』からの「自然」の用例を丁寧に見ていくと、この連載エッセイの初回で取り上げた、デフォーが同時期の1704年に発表した『嵐 (The Storm)』に関しての筆者の考察には若干修正が必要に思われる。6年前に筆者は「デフォーは「科学」に憑かれた作家なのだが、それ以上に「宗教」的人間でもある彼は嵐の根本原因を「神」の御業とも考えていて相反する気持ちが文面に見え隠れする」と述べたが、下線部〈「科学」に憑かれた〉は〈「科学」の不確かさに憑かれた〉と書くべきであった。ただし、その論考の同ページの註13では次のように述べている：
「(『嵐』からの) 当該引用の少し後に次のような言説がある：“The Christian begins just where the Philosopher ends;” (p. 14) (キリスト教徒は科学者が終わるまさにその地点から始まる)。ここでのコンテキストは「自然 (現象) の探求・究明」なので、「科学的解明が限界に達したら、そこから神への帰依と信仰が始まる」と解釈できよう。」当時のこの記述は的を射ていると思う (以上、〈「自然」の声を聴け (1) 序〉 pp. 6-7を参照)。

II ワーズワスの「自然」への序論

イギリス浪漫派の詩人、ワーズワス (William Wordsworth 1770-1850) の「自然」について書いてみたい、という想いからこのエッセイは始まった。大学 (の学部) 時代にワーズワスが専門の教授による、この詩人の代表作『序曲 (The Prelude)』の講義を受講したが、当時の筆者は英語にも英文学にも完全に興味を失っており、授業中は居眠りばかりしていた記憶しか

ない (果たして、この科目の単位を取得した記憶もない)。その後一念発起し、18世紀の英語英文学を中心に研究に取り組んでいた30代最後の年に、何かの縁で、ケンブリッジ大学に一年間留学する機会に恵まれた。ケンブリッジ滞在で得た教訓の一つが、キリスト教についての教養がなければ真の意味で英文学作品を鑑賞することはできない、というものだった。例えば、ケンブリッジの様々なカレッジの名称に限ってみても、そのものずばりのジーザス・カレッジやクライスト・カレッジは言うまでもなく、トリニティ [三位一体]・カレッジ、エマニュエル [救世主=イエスの別称]・カレッジ、コーパスクリスティ [キリストの身体=聖体]・カレッジなど、キリスト教の教義に深く関係する用語 (語彙) で溢れている。このような環境の中で生活しているうちに、この大学の卒業生でもある二人の偉大な詩人ミルトン (クライスト・カレッジ卒) とワーズワス (セイント・ジョンズ [聖ヨハネ]・カレッジ卒) に強い関心を抱くようになった。帰国後は、これまで通り、デフォーの句動詞 (phrasal verbs) の研究に打ち込む傍ら、授業の合間などを利用してワーズワスの『序曲』を少しずつ読み始めた。この読書は気が向いた時に、1日に数行という極めてゆっくりしたペースで読んでいったので、読み通すのに10年はかかっただろう (途中から、ミルトンの『失樂園 (Paradise Lost)』も同じようなやり方で数行ずつ読み始め、『序曲』を読み終えた数年後に読了した)。『序曲』を読みながら常に気になったのが、この不世出の詩人の「自然 (nature)」の用法とその意味である。1805年に出版されたワーズワスの自叙伝とも言えるこの長編叙事詩は、素晴らしい詩的表現で筆者を魅了する一方で、この詩人の体験と思索に基づいた宗教 (信仰) 的かつ哲学的精神世界の記述においては、読解するのが難しく、一筋縄ではいかない箇所が多発する。ワーズワスの〈精神世界〉の理解の鍵を握る語、まさにキーワードが「自然」なのである。そして、この語の意味を正確に掴むのが非常に難しいのだ。デフォーの「自然」は、18世紀前半の印刷・出版の慣習により、(微妙な) 意味の違いに関係なく、基本、大文字 “Nature” で表記される。一方、19世紀前半のワーズワスの頃には、文中の普通名詞は小文字で始まるのが原則だ。したがって、大文字で表記される “Nature” には (擬人化が意図されているか否かは関係なく) 「大自然・造化」の特別な意味合いがあり、小文字の “nature” はそれ以外の「性質、本性」等の意味の区別が作者 (詩人ワーズワス) によってなされているように思われる。

今回のエピグラフを改めて引用する：

... the mind / Learns from such timely exercise to keep
/ In wholesome separation **the two natures**, / The one
that feels, the other that observes. (p. 238)

ここでの“natures”は小文字表記になっていることから、人間の内なる「自然(本性・本質)」についての描写と考えられる。この「自然」は、「感じる自然(The one that feels)」と「観察する自然(the other that observes)」の二つに分けられているが、この区別は、前者を「主体(主観)」、後者を「客体(客観)」⁶と見做すことができるのかもしれない。もしそうであれば、デフォーの用例で見たマクロコスモス(宇宙)における二つの自然、すなわち「創造する自然(*Natura Naturans*=Nature Naturing)」と「創造される自然(*Natura Naturata*=Nature Natured)」とワーズワースの引用におけるミクロコスモス(一人の人間)としての二つの「自然」は互いに呼応する関係にあると解釈できるのではないか。というのも、「創造する自然」及び「感じる自然」が主体(主観)的なのは形而上的で不可視な存在だからであり、一方「創造される自然」及び「観察する自然」が客体(客観)的なのは形而下的で可視化される存在だからである。

ここで筆者は、エピグラフの主語“the mind”についても考えてみたい。この『序曲』には実は副題があり、それは“Growth of A Poet's Mind”(ある詩人の精神[心]の成長)となっている。つまり『序曲』は詩人の“mind”とこの作品のキーワードである“Nature (or nature)”との関係についての詩、と捉えることも可能なのだ。また、この“mind”も、“nature”と同様に非常に多義的で、例えば『リーダーズ英和辞典』では1aの語義だけでも「《知的な》心、精神；理性、正気；《心》精神、プシケ(psyche)」とあり、それぞれ微妙にニュアンスの異なる意味が記載されている。筆者は、初回の考察で、イギリスの哲学者コリングウッド(R. G. Collingwood: 1889-1943)の“mind makes nature; ...”(p.7) (思考する心が自然を作り出す)という言葉を紹介した。この言説は「コリングウッドが単独で作上げたものではなく、古代ギリシャ哲学の伝統を踏まえた上で」、それ以降のさまざまな「哲学者

たちの考えを集約したもの」と述べている。⁷ 下線部の“mind”を単に「心」とせず、「思考する心」としたのは、“heart”と区別するためで、仮に“heart”が“mind”よりも主観的で情緒的な「心」であるならば、“mind”はより客観的で理性的な「心」となるからである。

さて、コリングウッドの“mind makes nature;”における“nature”はワーズワースの「二つの自然」のうちの「観察する自然」、また、デフォーの引用で見た「二つの自然」のうちの「創造された自然」に相当するものであろう。また、「マインド(心)が自然を作り出す」というのは唯心論(あるいは仏教の唯識)とも通底するところがあるように思われる。例えば、三島由紀夫は自身のエッセイ「小説家の休暇」(新潮文庫『小説家の休暇』所収)で、上述の内容に極めて密着した学術的な議論を展開している：

(前略) 古代希臘(ギリシア)のみならず、古代のあらゆる民族のあいだでは、多神教的な自然の擬人化が、唯心論的自然観を形成していた。というのは、古代人の唯心論には、共同体的な意識の裏附があり、そもそもこの世界の混沌未分なころの状態(カオス)を作り出した運動の原因すら、プラトンによればプシケに他ならず、まして秩序をコスモスを作り出した力は良きプシケに他ならないのであるから、自然の擬人化が自然に心を賦与したことであるならば、自然はただちに人間の唯心論的秩序に組み入れられたことになる。カオスやコスモスを作ったプシケも、人間のプシケも同質のものだからである。(後略)(p. 120)

まず、読者はここでの「プシケ」は英語の“mind”に相当することを押さえておく必要がある。したがって、最初の下線部「唯心論的自然観」とは“mind makes nature;”を日本語に置き換えたものと解釈することができるだろう。

III おわりに

デフォーの『レビュー』から、1706年の二つの記事を読み、「自然(Nature)」、正確には「創造する自然(*Natura Naturans* = Nature Naturing)」を「神(God)」と

⁶ 例えば、岡三郎訳(『ワーズワース・序曲』)では、エピグラフで引用した箇所を「精神というものは、時宜を得た修練によって、その二つの性質、すなわち、感情を働かせることと、客観的に観察することを完全に分離して守り通すことを習得するものなのだ」と訳しているが、“(the other) to

observe”をただ「観察する」と直訳するのではなく、「客観的に」とわざわざ言葉を足しているのは筆者と同じ見解に思われる。

⁷ 〈「自然」の声を聴け(1)序〉註25より、p. 14.

呼ぶことは、神の名を汚す渚神（とくしん）的行為と18世紀前半のイギリスでは見做されていたことを確認した。この状況は、ワーズワスの19世紀前半でも大きくは変わっていないように思われる。例えば、「（ワーズワスは）自然と神とを同一視している」と読者の批判に対して、懇切丁寧にその誤解を解こうと努めていたことが彼の書簡から窺える（松下千吉 pp. 82-83）。ワーズワスの「自然」について考察は次回に譲るとして、デフォーの「自然」と「神」との関係については、これまでも度々触れてきた。⁸ その中で、デフォー研究者であるノヴァク（Maximillian E. Novak 1930-）の言説「デフォーの摂理（神意）は完全に自然を通して機能し、しばしば自然と区別がつかない（Defoe's Providence works entirely through nature and is often indistinguishable from nature. p. 6）」⁸はすでに引用したが、ノヴァクはそれに続けて「デフォーは、神を〈創造する自然〉と見做す彼自身の理論と、汎神論者の〈創造された自然〉を明確に区別したけれども、自然の原因の中に神を求めるといふ彼の決断は、現象世界に対してもほとんど同じ見解を結果として生み出すことになる（Although he drew a firm distinction between his own theory of God as 'Nature Naturing' and the pantheist's 'Nature Natured,' Defoe's decision to seek God in natural causes results in almost the same view of the phenomenal world. p. 6）」という極めて重要な指摘をしている。これには解説が必要だろう。汎神論者の〈創造された自然〉とは、ノヴァクが言うところの下線部「現象世界」、すなわち、森羅万象、（目に映ったり手で触れることができる）物質世界のことで、汎神論者はこのような全ての「もの」に神が「内在」する、と考える。デフォーはその考えを否定しているように見えるが、彼の（例えば地震や嵐などの目に見える）自然の原因に神を求めることは、結果として汎神論者と同じ見解をもたらす、というのだ。つまり、「自然」を二つに分けて、片方だけを「神」と呼ぶのは矛盾している（あるいは「虫がいい」）ということになるのだろう。筆者にはデフォーのこの態度は汎神論者（あるいは異端者）の烙印を押されたいための苦しい弁明（むしろ詭弁）に思われる。その根拠として、例の『レビュー』の〈雑感〉の中で「創造する自然、それを私

は神と呼ぶ」における「神」について、自分の真の意図は「自然の神（the God of Nature）」だとデフォーが述べていることに筆者は着目する。このフレーズの曖昧性については前回の考察でも触れたが、このコンテキストではさらに一層意義深いものがあるため、改めて引用する：

（前略）下線部“the GOD of Nature”を便宜的に「自然の神」と日本語に置き換えたが、そもそもこのフレーズ自体が〈曖昧 (ambiguous)〉な表現である。というのも〈自然、すなわち万物、物質世界を支配し統括する神〉というオーソドックスな解釈と同時に、“of”を「同格」の意味に採れば〈自然という神〉という解釈も成り立つからだ。（村田 2025 p. 37）

誌面では〈自然 = 神〉を完全否定し、〈自然 < 神〉に訂正したにも関わらず、この曖昧な表現は常に〈自然 ≤ 神〉を含意し、この点で、デフォーは「自然は神と完全に一致する部分がある」と密かに信奉していたのではないかと筆者には思われてならないのである。⁹（つづく）

引用文献

- Collingwood, R. G. (1945) *The Idea of Nature*. Oxford: Clarendon Press.
- Defoe, Daniel (2005) *A Review of the State of the English Nation* Volume 3: 1706 (edited by John McVeagh). London: Routledge.
- Defoe, Daniel (2001 [1705]) *The Consolidator*, [in *The Stoke Newington Daniel Defoe Edition*], (edited by Michael Seidel, Maximillian E. Novak, Joyce D. Kennedy). New York: AMS Press.
- Novak, Maximilian (1963) *Daniel Defoe and the Nature of Man*. Oxford: Oxford University Press.
- Sutherland, James (1938) *Defoe*. Philadelphia: J. B. Lippincott Company.
- Wordsworth, William (1966 [1805]) *The Prelude or Growth of A Poet's Mind* Text of 1805 (edited by Ernest De Selincourt). London: Oxford University Press.

⁸ 村田 (2020) pp. 6-8 ; 村田 (2021) pp. 56-59 ; 村田 (2023) p. 25 ; 村田 (2025) pp. 35-38, & p. 42 を参照のこと。

⁹ 興味深いことに、ワーズワスも『序曲』で“the God of Nature”を一度使用している：“But blessed be the God / Of Nature and of Man that this was so,”（しかし、自然と人間の神に感謝あれ、これがそうであったように: VIII 436-437, p. 138).

ここでの「自然の (of Nature)」は「人間の (of Man)」と等位構造になっているため“the God of Nature”の“of”を「同格」に解釈することは、「人間という神」という「読み」があり得ないために、不可能になる。つまり、ここでの曖昧性は完全に排除されている。詩人は「渚神的」と読者に思われないうために、あえて“of Man”を追加したのだろうか。

- 岡三郎 [訳] (1980 [1968]) 『ワーズワス・序曲』 国文社.
- 松下千吉 (1996) 『ワーズワス考 — 人 (間) ・自然・唯一者—』 京都修学社.
- 三島由紀夫 (2022 [1982]) 『小説家の休暇』新潮文庫 (17刷).
- 村田和穂 (2020) 「自然」の声を聴け—英米文学作品における“Nature”をめぐって—(1) 序 『有明工業高等専門学校紀要』第55号, pp. 1-15.
- 村田和穂 (2021) 「自然」の声を聴け—英米文学作品における“Nature”をめぐって—(2) 『有明工業高等専門学校紀要』第56号, pp. 55-62.
- 村田和穂 (2023) 「自然」の声を聴け—英米文学作品における“Nature”をめぐって—(4) 『有明工業高等専門学校紀要』第58号, pp. 21-28.
- 村田和穂 (2025) 「自然」の声を聴け—英米文学作品における“Nature”をめぐって—(6) 『有明工業高等専門学校紀要』第58号, pp. 34-43.